



オディロン・ルドン

ヴィオレット・ヘイマンの肖像

紙 パステル 縦72cm 横92.3cm 1901年
クリーヴランド美術館蔵

Odilon Redon, French, 1840-1916. *Violette Heymann*, 1910. Pastel on Paper, 72 x 92.4 cm.

©The Cleveland Museum of Art, 1999, Hinman B. Hurlbut Collection, 1976. 1926/ W. P. E.



紅芙蓉



白芙蓉

李迪

紅白芙蓉図

国宝 双幅 絹本着色

各幅縦25.5cm 横25.9cm 慶元3年(1197)

東京国立博物館蔵

作品解説

李迪^{りてき}

芙蓉図^{ふようず}

京都大学美学研究室の試算によると、明治以後の売立入札目録に載せる中国絵画は、四十万点をくだらないという。とすれば市場に出ない個人や寺社収蔵の中国画は数百万点にのぼるだろう。千二百年を越えるわが国への舶載の歴史は、この膨大な数量を生み出した。その収集の頂点に立つのが、金閣、銀閣で名高い足利義満、義政に代表される北山、東山文化時代に招来された梁楷^{りやうかい}、牧谿^{もつげい}など南宋院体画、禅僧の水墨画である。この一群は世界に比類のない最高の名品と評価されていて、『芙蓉図』も十二世紀末の宮廷作画機構、いわゆる画院画家の制作になる一つである。

明の太祖の禁止令により、劇的に廃絶された抹茶の風は、日本では茶の湯として隆盛を極めた。茶室の床の間という狭い空間にかけられたため、名品の多くは切られて小画面に仕立てられている。『芙蓉図』も、もと大幅を二つに切ったとする説がある。それでは双幅の左上に平行する形で書かれた「慶元丁巳歳李迪畫」の同文の落款^{らくかん}が二つもあるのは不合理である。画冊から離れたとする説がある。それでは折枝^{せつし}の構図として落ち着かない。ともかく款記は同筆ではないとする意見が、一九六七年に米人学者によって提唱されている。けれども補筆補彩も含めて古画に事故は逃れられぬ運命である。ほの暗い茶席の一隅を輝くように照らしていた往時の美しさと栄光は、今も少しも変わっていないと思われる。

(古原宏伸)

オディロン・ルドン

ヴィオレット・ヘイマンの肖像^{しやうざう}

横顔の画家ルドン。例えば石版画集『聖アントワヌの誘惑』では、「神よ助けたまえ」と呟く聖人の謹厳な横顔が、闇と光明との境をくつきりと刻む。若き仏陀へも変貌するその横顔は、女性の姿となつては『神曲』のベアトリーチェ、溺死するオフエーリア、『神々の黄昏^{なせがれ}』のブリュンヒルデ、さらにはジャンヌ・ダルクなど、芸術上・歴史上の人物に仮託され、次々に変奏される。

二十世紀に入ると、家族や知人の横顔も頻繁に描かれるようになる。息子アリアや病後の回復期にあるルドン夫人。その伏し目がちで寡黙なたずまい。そこには観客に挑みかかってくる、見すくめるようなまなざしなど存在しない。ルドンの眼球は、視線を躲^かし、回避する。

その代わりに我々を見つめ、心の中で覗きこむようにして押し黙っているのが、ルドンの花だ。時に戦慄を覚え、時にどきまぎさせられるほどに生々しい霊が密やかに息づいている。本作では、花々はモデルの脳裏に浮かぶ幻想とも、その沈黙の会話の相手ともつかず、妙齡の女性の精神を証するがごとく、画家のバステルと画面との接点におのずと生まれて、画面に咲き広がる。一八九三年にルーヴル美術館に収められたピサネットの《デステ侯爵婦人の肖像》を彷彿とさせるこの肖像は、また同時代の藤島武二の《蝶》(一九〇四)とも、遠く遙かに共鳴している。

(稲賀繁美)

二枚の絵

二〇〇〇年五月一〇日 印刷
二〇〇〇年五月二五日 発行

編者 高階秀爾

平山郁夫

丸谷才一

和田 誠

編集人 山本 敦

発行人 山本 進

発行所 毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋

〒530-8251 大阪市北区梅田

〒802-8651 北九州市小倉北区紺屋町

〒450-8651 名古屋市中村区名駅

印刷 東京印書館
製本 大口製本印刷

【非売品】

©Mainichi Newspapers Co., Printed in Japan, 2000